



2024年
6月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
<https://www.nskk-kobe.org/>



発行責任者
司祭 林 和 広
印刷所
文明堂印刷所

母を看取って

司祭 ペテロ 中原 康 貴

昨秋に膵臓癌でステージ四と診断された母が、先週、逝去しました。父のときと同様、実家で私が葬送の儀を司式し、家族で母を主の御許へと送り出しました。

両親は当初、「葬儀は行わなくていい」と言っていました。父が、「康貴は牧師なのだから、康貴に葬儀をやってもらえばいいじゃないか」と言い、私が葬儀を行うということで一応納得しました。そして七年前、父が逝去した際、母、兄家族、そして私たち夫婦で、花の飾付をはじめ、できることは家族で行い、私が葬送の儀を司式して実家から



父を主の御許へと送り出しました。両親は若い頃、福音派の教会で洗礼を受け、そこで出会って結婚しましたが、私が生まれる頃には教会に行かなくなっていました。ですから、私が行う聖公会の葬送の儀に、母は戸惑っているように感じました。しかし、後日「康貴に葬儀をしてもらって良かった。みんなでお父さんを送って本当に良かった」と何度も口にしていました。実は、母が緩和ケア病棟に

入院してから、言葉にはできないモヤモヤを感じるようになります。「母の葬送の儀を行えるだろうか」と少し不安がありました。しかし二日間、母に付き添い、最期を看取ることでできたからか、そのモヤは消え、「本当にお疲れ様。よく頑張ったね。これからは天国での素晴らしい永遠の命を楽しんで」という晴れやかな気持ちで、母を送り出すことができました。

父の時も逝去してから、しばらくの間は不意に寂しさを感ずることがあったので、これからは母が旅立った寂しさを少しづつ感じるようになるのでしょうか。しかし、母がしっかりと病気を受け入れ、最期まで抗うことなく旅立った凛々しい姿は、「死への向かい方」を私に強く示してくれ

ました。

今回、母を見送って痛感したこと、それは「人生は思ったほど長くはないかもしれない」ということです。母は癌が見つかるまで、朝は日の出を見ながら一時間程度散歩し、日中はプールで何キロも泳ぎ、さらに花壇や畑の手入れを楽しんでいました。

ですから、六七歳で逝去した父とは違って、母は私よりも長生きするかもしれないと思っていました。その母が昨夏から体調不良を訴えるようになり、一年もせずに旅立ったことは、私の人生観に大きな影響をもたらしました。

さすがに「明日が人生最後」というのは難しいですが、「来年、再来年には逝っているかもしれない」と考えるべきだと思ふようになりました。そして、そのような視点をもって「これから司祭としてどのようにして御心を生きていくか」ということをより大切に考えていきたいと思ひます。

(高知聖パウロ教会牧師)

宣教委員会から教会の皆様へ(2)

司祭 バルナバ 瀬山 会治

【わたしたちのビジョン】

日本聖公会神戸教区宣教150周年まであと2年
「ともに聴き 分かち合い 伝えていこう、
イエスさまの福音を」

イエスさまの福音を「

教区宣教委員会では上記のような【わたしたちのビジョン】を提言いたします。ご存じの通り、神戸教区は2026年に宣教150年を迎えます。この時を一つの分岐点としてとらえ、次の時代の福音宣教に向けて教区内の各教会がどのように進んでいくことができるのかを話し合っていたきたいと思えます。

昨年11月に清里で行われた宣教協議会から出された「2023年宣教協議会からの呼びかけ」は、各教会にも届いていると思います。そこには、「1. 神のみ声に耳を傾けよう。2. 人々の声に耳を傾けよう。3. 世界の声に耳を傾けよ

う」と言う3つの呼びかけが掲げられており、教会が宣教を行う時、『声に耳を傾ける』ことの大切さが呼びかけられています。つまり、神と人と世界から求められている教会の必要性に答えていくことが、教会の行うべき宣教であるということではないでしょうか。まずは、神と人、世界の声に耳を傾けることから始めてみましょう。

「実に信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」

(ローマの信徒への手紙 10章17節)
(教区宣教委員会 委員長)

宣教推進講演会

宣教委員会委員長



した。

講演会では、植松 誠主教(前北海道・前首座主教)が、ご自身の信仰体験を通してわかりやすくお話していただきました。内容は以下の通りです。1、あなたは宣教の中心にいる神様から選ばれた1%なのです。2、宣教とは、自分の生き方言葉でキリストを証しすること。他人任せではなく、あなたがどのようにイエス様を、福音の喜びを伝えるのか、そのことに尽きる。3、こんな信仰を持ったスゴイ信徒がいる！ 4、宣教するということ。「一人ひとり

あり、それは教会を強め、信仰の喜びをさらに増すことにつながって行く素晴らしいことなのだを教えていただきました。なお、講演会の動画は教区のホームページから視聴できますのでご覧ください。

がどう生きるのかが宣教となる。「神様のみ手、み業がそこにある。」「神様の恵みを私たちは受けて生きています、それこそがスゴイ宣教なのだ。」などの多数の言葉をいただきました。

次回、6月15日(土) 13時から「これからの教会に必要な宣教の在り方」と題して神戸聖ミカエル大聖堂で行われ、リモートでも参加できます。講師は、キリスト新聞社代表取締役社長の松谷信司氏にお話をさせていただきます。松谷氏は雑誌「ミニストリー」の編集長として若者の心をとらえる企画で活躍され、今までは異なる視点で教会像を語り、今の教会に欠けている「宣教の在り方」について語っていただきます。きつと皆さんの教会に役立つきっかけやアイデアを聞きますので、ぜひ、ご参加ください。

宣教と言われると「難しい」とか「神学はわかりませんが、今自分の信仰をありのまま証しすることで

世界の聖公会の動向

司祭 ポール・トルハースト(神戸MTSチャプレン)

カンタベリー大主教による

イースター・レター

カンタベリー大主教 ジャスティン・ウエルビー



食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、あなたはこの人たち以上に私を愛しているか」と言われた。ペトロが、「はい、主よ、私があなたを愛していることは、あなたがご存

じです」と言うと、イエスは、「私の小羊を飼いなさい」と言われた。二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロが、「はい、主よ、私があなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「私の羊の世話をしなさい」と言われた。三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、私を愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「私を愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何かもご存じです。私があるあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「私の羊を飼い

なさい。」(ヨハネによる福音書21章15節〜17節)

ペテロの混乱と悲しみは、イエスの明白な教えと極めて対照的です。昇天前、イエスは生身のほぼ最後の姿で、ガリラヤ湖畔において弟子たちの何人かと親密な友情のひとときを過ごし、食事を共にしました。この一見シンプルな出来事には、いわゆる魚・火・パンといった、基本的な物質による象徴性が満ちています。そして日常の行動こそ、イエスを愛し従う人々に向け、弟子たちが行うべき配慮のたとえとなるのです。私の羊を飼いなさい！と、主は命じられました。そうしてこの二千年間、教会は彼の足跡に

倣ってそれを実行しようとしてきましたし、これからもそうし続けるでしょう。

しかし教会の司牧的な証しやケアは、時に複雑で不完全で、満足のいくものとはなりませんでした！私たちは何度も何度も、パンを石に、ワインを苦い胆汁に、火を拷問と死へと変えてきました。何世紀にもわたって私たちは互いに敵対し合い、愛の名のもとに無視し、顧みず、迫害を続けてきたのです。

昨年は何んと苦い年だったことでしょうか！聖地の中心は殺戮と混乱に支配されました。私は10月にエルサレムを訪れ、現地の聖公会コミュニティや他のキリスト教の伝統を支援し、ガザやその他の地域の人々の苦しみについて学ぼうと試みました。ナゴルノ・カラバフからアルメニアの家族たちが大量脱出した後の10月初旬、私はアルメニアにいたのです。またつい2カ月前にも、再びウクライナに行き、戦争の絶望的な影響を目の当たりにしました。これらの紛争に巻き込まれたすべての人々にとっては、暴力によっ

て負傷したトラウマを負った人と同じく、まるですべてに終わりも復活もないように思えてしまうでしょう。

しかし、このような状況下でもまだ希望があります。なぜなら偉大なる羊飼いであるイエス・キリストとして、神が私たちの前にいらっしやることを知っているからです。キリスト者は、人間の志が何度も何度も壁にぶつかるといふ現実も分かっています。しかしそれと同時に、キリストが死に打ち勝ったことが、すべての人々に希望をもたらすだろうことを強く共有しています。だからこそ、絶望によつてこの世界の前途が危ぶまれることを許すわけにはいきません。今はまだ恐ろしい対立と危機の中ですが、私たちの信仰は、平和をつくり和解させて下さるキリストにあります。このイースターに、皆さんの信仰が強められ、その働きが祝福されますように。そしてキリストの羊を飼うとはどういうことなのか、この一年共に学ぶことができますように。

(管区事務所だより)

鳩だより

《敬称略》

祝成婚

4月13日(土)
ガブリエル 阪村 美樹
行松 美樹
神戸聖ミカエル教会

教籍異動

4月17日(水)
ジョージ 日笠 勝正
ソフィア 日笠 昭子
神戸聖ヨハネ教会から、
神戸聖ミカエル教会へ

ご逝去

3月31日(水)
マリア・マグダレン
楊 少蘭
明石聖マリア・
マグダレン教会

4月8日(月)
アンデレ 田中 重正
松山聖アンデレ教会



4月12日(金)
モイセ 塔田 光俊
米子聖ニコラス教会

4月18日(木)

樋口 純子
神戸聖ミカエル教会

西四国伝道区

4月29日(月)、高知聖パウロ教会で伝道区合同礼拝・親睦会が行われた。

22名の参加者があり、土佐巻きと田舎寿司を詰め合わせた弁当を頂き、カードゲームを使ってお互いの親睦を深めた。そして、聖餐式をもって閉会した。次回は秋に松山聖アンデレ教会で開催される予定。

「宣教協議会からの呼びかけ」を受けて

今年2月に「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ(清里コール)」がありました。そして、神のおとずれの紙面をお借りして9回に分けて宣教協議会参加者が、清里コールについてご紹介します。

第一回は、「1、神のみ声に耳を傾けよう(祈り・み言葉・礼拝)」a、イエスの弟子となる：わたしに与えられた賜物はなに？

わたしたち一人ひとりにはさまざま与えられた賜物があり、イエスの弟子として信仰生活を送っています。そのようになわたしたちが、どのようにして神さまの宣教の業のひとりとして参与することができるとか、ご紹介します。

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていけば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである」(ヨハネによる福音書15章5節)

7月の教区関係教役者 逝去記念聖餐式

日時 2024年7月4日(木) 午前10:30
場所 神戸聖ミカエル大聖堂

* 7月の記念逝去教役者

1日	司祭	ロバート	コールマン
3日	伝道師		小川 淳一
5日	司祭	レジナルド	セイバリー
6日	宣教師	フレデリック	ウォーカー
11日	伝道師	マリア	横田 キヨ
12日	修女	ユニケ	岡上 千代
14日	司祭	パウロ	中村 弘
15日	宣教師	オクタビア	ジュリアス
15日	司祭	ウィリアム	リチャーズ
19日	司祭	マッテヤ	末永 恵介
20日	司祭		広瀬 健介
21日	宣教師	ドロシー	ケ一 ス
22日	伝道師	グレース	小西 道一
27日	宣教師	ルイーザ	ガルゲ一
28日	主教	マルコ	小池 俊男

広島平和礼拝ご案内

8月5日(月)

13時00分 受付開始
15時00分 被爆証言
『平和の種まき
～平和の実現は一人ひとりから～』
月下美孝氏
18時30分 平和のためのつどい
(カトリック教会との合同行事)

8月6日(火)

8時15分 原爆死没者慰霊行事
8時00分 広島原爆逝去者記念聖餐式
司式 主教 オーガスチン 小林尚明
説教 マルコ 柴本孝夫
(日本聖公会九州教区
福岡聖パウロ教会牧師)

締め切り 2024年7月5日(金)